

平成29年度日中緑化交流基金より助成金交付を受けている2か所「黒龍江省チチハル市碾子山地区及び内モンゴル通遼市」の現地視察と樹木の成長状況に関する協議の為、今年9月下旬2班の緑化訪中団を派遣している。まずは北京に一泊、カウンターパートの全青連（中国国際青年交流中心）に伺い、植林現場の進捗状況の説明を拝聴し、翌日早朝チチハルと通遼の2班に分かれ、各々空路で現地を訪問視察・現場担当スタッフと懇談しました。

チチハル班；全青連（青年交流センター）の王希宏部長に同行頂きました。現地では地元林業局の部長から松の植林状況の説明を受けました。当初は林業局の判断で予定の松とポプラとしたが、ポプラの寿命は30年程度であり、一方松は状況にもよるが100年くらいの寿命が見込まれ、またポプラは病虫害の被害を受けやすい等の問題もあり、土質の状態等を総合的に勘案した結果、今年の植林は全て松としているとの説明を受けました。更に、今年は異常気象で集中豪雨に見舞われ、植林地の一部が冠水し苗木が枯れたが、来春の補植で復旧する様に努力する旨、説明を受けて参りました。

通遼班；本緑化事業の中国側統括責任者である全青連（中国国際青年交流中心）の洪桂梅副主任が同道され、そのお陰で案内役として現地植林の責任者である奈曼旗共青团の王書記より丁寧な説明をお聞き出来ました。植林現場では、五葉松とポプラが植樹されており、畝と畝の間隔を広くとること、植樹の根部分を深く植え込むこと、などの当協会三上副理事長の昨年の指導が徹底されており、順調な生育を確認することができました。

ホテルへの帰路の途中で、洪桂梅主任の計らいで、奈曼旗での植林事業が始まる以前の場所を案内してもらいました。砂山を上がっていくと、その先には広大な砂漠が広がっており、以前は環境的に人が住む事ができなかったが、緑化によって入植者が増え、現在の奈曼旗が形成されたこと、更には緑化事業が中国の人々の役に立っていることが実感でき、とても有意義な経験でした。

